

杉原薫著

『世界史のなかの東アジアの奇跡』

名古屋大学出版会 2020年 vii + 765ページ

しまだりゅうと
島田竜登

世界銀行から『東アジアの奇跡』[The World Bank 1993] が出版されてはや30年がたつ。第2次世界大戦後の20世紀後半、東南アジアを含む東アジア各国は、国によりタイミングは異なるが、急速な経済成長を遂げることとなった。まず日本が高度経済成長を遂げ、続いてアジア NIES や ASEAN4 といった東アジアや東南アジアの諸国が日本を追いかけた。東アジアの奇跡と呼ばれる現象は、すでに1990年代には注目され、当時の現代的な問題意識に支えられ、経済学的分析の対象とされていたわけであるが、本書はこの20世紀後半の「東アジアの奇跡」を他に類をみないほど極めて長期的な視点で、かつ世界的な広がりをもって検討した、いわゆるグローバル経済史の一書である。

I 本書の概要

本書は、本論13章のほか、序章「東アジアの奇跡の意味するもの」と終章「総括と展望」、さらには3つの補論から構成され、全体として700ページを超える大作である。著者の杉原薫氏はこれまで多数の論文や編著などを日本語および英語で出版してきたが、本書はとくに杉原氏の単著『アジア間貿易の形成と構造』（ミネルヴァ書房、1996年）に続く大部のモノグラフである。両書の刊行には約25年の開きがあるが、この間、著書は日本ではもちろん国際的に経済史研究をリードしてきた。この四半世紀にわたる著者の研究成果は、そのまま世界的な第一線級のグローバル経済史研究の動向そのものを示すものといっても差し支えないであろう。

本論は3つの編からなる。第I編「東アジア型経済発展径路の成立と展開」、第II編「近代世界システム像の再構築」、第III編「戦後世界システムと東アジアの奇跡」という3編構成である。第I編がおよそ1500年頃から1820年前後までのいわゆる近世(初期近代)を主たる対象とし、第II編がおよそ19世紀から20世紀半ばまでの狭義の近代を扱う。さらに第III編はおもに第2次世界大戦後の現代が議論の対象となる。著者によれば、世界経済の発展には3つの段階があるという(651ページ)。この3つの段階とは、上述の3編構成で示された時期区分のことである。そして、この3つの段階を通じて、「西ヨーロッパで始まった産業革命径路」と「東アジアで発展した勤勉革命径路」とが進展してきたという。

なお、こうした時系列的に分けられた編構成であるが、しかし実際には、後述するように、第I編にせよ、第II編にせよ、どちらの編も第2次世界大戦後の「東アジアの奇跡」の歴史的起源の解明を長い時間軸で検討するものとなっており、3つの編が時間軸で完全に切り分けたものとなっているわけではないことには注意を要する。2つのタイプの径路は長い目でみれば近世に端緒があり、それが近代、現代を通じて発展してきていることを示すのが本書の主要課題となっているのである。

いずれにせよ、近代世界経済を「西ヨーロッパに端を発する工業化と、その自余の世界への波及」というこれまで常識とされてきた見方を否定する極めて意欲的な意図をもった著作であるが、まずは編ごとにその内容を概観してみよう。

第I編は、第1章「勤勉革命径路の成立」、第2章「労働集約型工業化の成立と展開」、第3章「資源節約型径路の発見」、さらには補論1「南アジア型経済発展径路の特質」から構成されている。第1章では17世紀から18世紀の東アジアにおける労働集約的技術の発展を強調するとともに、第2章では東アジアにおける労働集約型工業の成立と展開を論じる。さらに、こうした労働集約型工業化の背景として、東アジアには資源・エネルギー節約型の特徴をもっていたことを明らかにする(第3章)。加えて、補論1では、南アジアにも独自の発展径路があったか否かを検証し、仮説的ではあるが、「生存基盤確保型発展径路」という、西洋型でもなく、東アジア型でもない、異なる発展径路が存在したと提起する。

第Ⅱ編は5つの章と補論1章からなる。すなわち、第4章「近代国際経済秩序の形成と展開——帝国・帝国主義・構造的権力——」、第5章「近代世界システムと人間の移動」、第6章「19世紀前半のアジア交易圏」、第7章「世界貿易史における『長期の19世紀』」、第8章「東アジアにおける工業化型通貨秩序の成立」、補論2「イギリス帝国主義・シティー・工業化の世界的普及——ケイン・ホブキンズ『ジェントルマン資本主義の帝国』の射程——」である。本第Ⅱ編は、著者の前著『アジア間貿易の形成と構造』で扱った、19世紀から20世紀半ばにかけての貿易や人の移動などを主要なモチーフとする。まず、第4章および第5章で、それぞれ貿易と人の移動を題材に、旧来の西洋中心的な歴史叙述に疑問を呈し、アジアの国際経済秩序や人の移動にもアジア独自のダイナミックな動きがあったことを指摘する。その上で、西洋型と東アジア型の発展経路が融合し、近代世界経済が存在し得たことを論じるのである。こうした2つの章で提示した総論を補強すべく、第6章と第7章はアジアの貿易史について、第8章ではアジアの通貨秩序史にかんする実証的個別研究を配す。さらに、これら各章では、各章で展開された実証的研究を世界経済史の文脈で解釈する。加えて、以上の著者の総論的研究と実証的個別研究を前提として、いわゆるジェントルマン資本主義論との融合を試みる（補論2）。

続く第Ⅲ編は第2次世界大戦後の分析である。本第Ⅲ編は、第9章「アジア太平洋経済圏の興隆」、第10章「東アジア・中東・世界経済——オイル・トライアングルと国際経済秩序——」、第11章「中東軍事紛争の世界経済的文脈——石油・兵器・資金の循環とその帰結——」、第12章「戦後世界システムとインドの工業化」、第13章「グローバリゼーションのなかの東アジア——1990年代の軌跡——」、補論3「熱帯生存圏と『化石資源世界経済』の衝撃」という5つの章と補論1章から構成される。まず第9章では「アジア太平洋経済圏」という空間が提示され、その興隆を概観する。その上で、中東を視野に取り込み、重要なエネルギー資源たる石油やいわゆるオイルマネーを分析視点としてとりあげ、世界経済の循環状況を明らかにするとともに、東アジア経済の位置づけを試みる（第10章、第11章）。さらに、インドの工業化を扱い、これを東アジアと対

比することを試み（第12章）、第13章では1990年代の東アジアにおける資源節約型発展経路の屈折を論じる。なお、本編に付された補論では、今後の経済の在り方として、熱帯のバイオマス起源の資源の効率的な利用の重要性を主張する（補論3）。

Ⅱ 本書の意義

そもそも1990年代後半以降、グローバル・ヒストリー研究が欧米を中心に進展した。現実世界のグローバル化が否定しようもない事実となり、歴史的な研究もグローバルな視野を考慮に入れざるを得なくなったことによる。近年のグローバル化はおもに経済の分野で先導されたこともあってか、グローバル・ヒストリー研究も経済史の分野が主導してきたことは広く知られている。グローバル・ヒストリー研究をリードしてきたグローバル経済史研究における本書の意義を考えてみたい。

本書の第1の意義は近代西洋経済の相対化である。旧来、イギリス産業革命を端緒としてその工業化の波が世界に伝播する一方、工業化を達成した国は世界各地に植民地を設け、植民地を工業製品の販路としたり、食料や原材料の供給地としたとみなされてきた。あるいは、ウォーラステインであれば、近代西洋経済が16世紀以降、近代世界システムを作り上げ、次第に空間的にも拡大し、アジアを含む外部世界を組み込んでいったと考えられてきた。こうした旧来の近代世界経済史像を塗り替えるのが本書である。著者は、速水融による近世日本の勤勉革命論を利用し、東アジアが16世紀以来、労働集約型の経済を創出し、19世紀には労働集約型の工業化を成し遂げたとする。これを西ヨーロッパ型の資本集約型の工業化と対比させ、相互が補完関係にあり、世界経済のなかで両者が融合したと論じたのである。

このことは、西洋中心主義の単なる否定ではない。たしかに、近年のグローバル・ヒストリー研究では西洋中心主義の克服は、その一大課題となっている。そのため、グローバル・ヒストリーの分野ではしばしばアジアの重要性を過度に強調することも、とくに日本でなされている。だが、グローバル・ヒストリーとは、その名のとおりに、「地球的視野」での歴史研究や歴史叙述が本来の意味である（グローバル・ヒストリーにおけるアジア史の扱いについては島田

[2022]を参照されたい)。グローバル・ヒストリー研究とはアジアを強調することと本来の意味を離れて理解されているなかで、本書は本来の意味で、アジア、とりわけ東アジアをグローバル・ヒストリー研究のなかに位置づけることに一定の成功をみている。この意味で、本書はグローバル・ヒストリー研究を格段に進歩させたとも評することができるであろう。

第2の本書の意義としては、グローバル経済史研究において、環境的要因分析を導入することを試みていることが指摘できる。グローバル経済史の分野においては、すでにポメラantzがその著『大分岐』[Pomeranz 2000]のなかで環境や資源の問題を、具体的には森林資源や石炭という題材でとりあげているが、本書著者もまた、西洋と東アジアとの対比において、環境や資源の観点を導入し、さらには経済学分析に新たな生産要素を加えることも提唱する。

たとえば、労働集約型の東アジアにおいて、資源節約的な経路が歴史的に生み出されたことを著者は指摘する(第3章)。このことを念頭に、著者は「21世紀における工業化の世界的波及を、地球の資源や環境に配慮しながら実現するには、資源集約型発展経路の直線的な拡大が望ましいとは思えない。そうではなくて、発展途上国が工業化を進める際には、欧米が提供してきた技術や制度に加えて、東アジアで根付いた技術や制度もそれに組み合わせたかたちで普及させなければ、世界経済の持続的発展を支えることはできない」(184ページ)と述べる。

また、経済学分析における伝統的な3つの生産要素(土地、労働、資本)のほかに、新たに水とエネルギーという要素賦存を考慮に入れる5要素節を終章において提唱する。ここでいう水とは安全な飲み水の確保なども意味しており、エネルギーについてもバイオマス・エネルギーを視野に入れている。すなわち生存基盤の問題と持続的発展の問題とを考慮に入れる経済史分析の必要性を説くのである。もっとも、こうした視点は、本書の総括の結果として提唱されるにすぎず、本書全体にわたって分析対象となっていないことは残念ではあるが、今後の課題として著者自ら提起されていることの意義は大きい。

さらに本書の第3の意義としては、歴史叙述における1つの野心的な試みであることを言及すべきであろう。本書は3つの編に分かれている。先述のと

おり、大まかにいえば第I編は近世、第II編は近代、第III編は第2次世界大戦後の現代を分析している体裁をとっている。しかしながら、各編各章を読み進めると、第I編や第II編のいずれも、その編が本来、担当する時代ばかりではなく、その後も分析の対象となっていることに気づく。つまり、「東アジアの奇跡」を歴史的に解明するにあたり、3つの時間層から現代的課題にアプローチしていることがわかる。換言すると、現代的な事象の歴史的な根源を、500年、200年、50年という異なるスパンで解明を試みており、それは現代社会が多層的な歴史的な経緯をもっていることを著者が自覚し、現代社会の歴史的根源を多層的的に解明することを試みているのに他ならない。少なくとも、多くの歴史学の研究書が単に時系列的な叙述にあふれていることを考えると、本書の編構成は非常に意欲的な試みであることに間違いはない。

III 残された課題

むろん本書といえども無謬の書たることはあり得ない。たとえば、意外にも著者はあくまで伝統的な経済史の分析手法を採用する。経済社会にアプローチする方法として、生産や流通ならびに金融や人口移動といった伝統的なテーマをとりあげるのである。もちろん、時に比較的大胆な試みをしたり、あるいは連関性を強く意識した分析を行ったりする。とはいえ、消費の面にまで分析が及ぶことは稀であるし、ジェンダーの問題を組み入れることも基本的にはない。そのため、分析の対象として、あれこれ不足しているという批判は容易であろう。ただし、消費やジェンダーなどといった新たな視点を取り入れてしまえば、さらに膨大となるであろう本書の理解を難しくさせるであろうし、そもそも1人でできる範囲を超えることは明白である。

また、本書は、基本、これまで著者が公表してきた諸論文を取りまとめたものとなっている。序章と終章は書き下ろしであり、全体を統合させる機能を果たしているが、本論各章や補論各章は大部分、著者がかつて執筆・公刊した論文を「ほぼそのまま収録」(739ページ)したものである。そのため、1冊の著書として微細なまでにストーリーが一貫しているわけではないし、また用語が一定していないこと

もある。たとえば、脚注のある章もあれば、脚注のない章もある。「モンsoon・アジア」と「海洋アジア」が本書全体を通じて同一なのか、否かについて戸惑うこともある。あるいは、「東アジアの奇跡」の分析とはいいながら、南アジアやアフリカも分析の対象とするなど、一読だけでは読者は著者の意図と主張を理解し難いものとさせている。少なくとも著者に対して、新書などの形で、本書の主要な論点を初学者にもわかりやすく説明する次なる書を期待したくもなる。

もっとも、本書が著者の長年にわたるグローバル経済史研究に挑んできた足跡を物語るものであると考えると、じつは本書は示唆に富む研究入門書といえるかもしれない。本書は「東アジアの奇跡」をグローバルな歴史的視点から検討・考察することを主題に掲げるが、今後の研究の在り方や次なるテーマを多数示唆するからである。先に述べたように、環境や資源の側面から長期的に実証研究を推し進め、持続可能な発展の在り方を模索することを勇気づけるものであるともいえる。あるいは、南アジアやアフリカの研究をさらに推し進めることで、より多様な歴史的経緯をもつ社会の特性を明らかにし、多様な発展径路を明らかにする手掛かりとなるであろう。さらには、1人で成し遂げることの難しいグローバル・ヒストリー研究の在り方について、それを志す人に深い示唆を与えるであろう。

かくして、本書はグローバル・ヒストリー研究に

おける1つの金字塔であることはもちろん、今後のグローバル経済史研究を鼓舞する著作である。

文献リスト

〈日本語文献〉

島田竜登 2022. 「構造化される世界——グローバル・ヒストリーのなかの近世——」 小川幸司・島田竜登編『構造化される世界 14～19世紀』岩波講座世界歴史 第11巻 岩波書店.

〈英語文献〉

The World Bank 1993. *The East Asian Miracle: Economic Growth and Public Policy*, New York: Oxford University Press (邦訳は白鳥正喜監訳『東アジアの奇跡——経済成長と政府の役割——』東洋経済新報社 1994年).

Pomeranz, Kenneth 2000. *The Great Divergence: China, Europe, and the Making of the Modern World Economy*, Princeton: Princeton University Press (邦訳は川北稔監訳『大分岐——中国、ヨーロッパ、そして近代世界経済の形成——』名古屋大学出版会 2015年).

(東京大学大学院人文社会系研究科准教授)